

ブス愚痴録

田辺聖子



文春文庫



文春文庫

ブス愚痴録

定価はカバーに
表示してあります

1992年3月10日 第1刷

著者 田辺聖子

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-715336-X

へ 春 文 庫

ブ ス 愚 痴 録

田 辺 聖 子



文 藝 春 秋

目次

泣き上戸の天女	7
ブス愚痴録	49
開き直り	87
忠女ハチ公	125
波の上の自転車	155
日本常民パーティ事情	183
恋捨人	209
よごれ猫	235
あんたが大将——日本女性解放小史	261
解説 山本容朗	309

ブ
ス
愚
痴
録

泣き上戸の天女

何にも思い当ること、あらへんのやが、と野中^{のなか}は酒を飲みながらまた考えてしまう。

この頃は家で飲む。いきつけの店は、いつも二人で行っていたから、行きにくい。二人でカラオケのデュエットなど聞かせていたから、店のママに、

（あれ、奥さんは？）

と聞かれると返事もできない。

（蒸発しよった、ともいわれへん）

野中は思いあぐねて、自分で水割りをつくりつつ、じっとり沈んで飲む。

もっともトモエと暮らすようになった一年半ほど前は、ずっと独り暮らしだったから、一人で飲むのに慣れていた。このところ、久しぶりに独り者の感覚が戻ってきている。

長いこと自炊をしていたので、台所に立つのも慣れていて、トモエが居なくなっただけからといって、日常生活に事欠くことはないのだ。チャンと豆腐を買って来て、今夜は湯豆腐をしたのである。

油揚げとさつま揚げと杓子菜を炊いたりするのもうまい。

（おらなんだら、おらなんだで、何とでもやるんやが……）

と野中は思う。

（しかし、急に、ファイと、おらんようになるのは、かなん……）

ファイと「家出」したトモエに腹を立てるといふより、ただただ、不可解なのである。解せないものであって、腹を立てるより以前の問題である。なんで「家出」したのか、理由を聞きたいのである。理由が分れば納得する。

（女房の「家出」で、男から見たら、みな、ワケわからへんのとちゃうか）

と友人の高原はいう。

（男が納得でける理由なんて、あらへんのやないか。しかし、君とこは仲よう、やってたのにな）

（そこや）

と野中はいった。

（喧嘩したこと、ないし、なあ……）

それどころか、トモエがいなくなる前の晩は楽しかった。晩めしは、湯豆腐と（野中は偏食家で、毎日、豆腐がなくてはいけない）鯛の刺身とかぶら蒸しであった。野中の好きなもの、というより、これなら食べられるというものが、トモエの手によっておいしくととのえられ、楽しくすませた。野中は、ふだん焼酎しょうちゆうのお湯割りしか飲めない男であるが、トモエは日本酒を飲む。二人で飲んで、とりとめもない世間話を交し、

（どや、ボチボチ、籍入れとこか？）

などと野中はいつていた。

一年半ぐらい二人で暮らして、これやったら、やっていけるなあ、と野中は思っていたのだ。トモエとなら正式に結婚してもよいと思った。

野中はいま四十一だが、まだ結婚していない。

会社では変人扱いされている。野中は自分では別に変人だと思わないが、偏食家なのと同様に、人間の好き嫌いが烈しい。人間の、というより、女の、といったほうがよい。気に入る女がなかなかいない。それでも若いうちは相応に、会社の女の子にももてたのだ。長身で、ちょっとにがみ走った顔付きで、学歴もまあまあ、という野中は、入社した女の子には毎年、目をつけられたようである。

しかし女の子を喜ばせるようなこともできず、言葉の飴あめを舐ねらせるのも不得手、という野中は、女の子とのつきあいが長つづきしない。そのうち、どんどん女の子に気むずかしくなってしまう。

あつという間に三十になり、前額が禿はげてきた。

それでもお袋が生きているうちは、心配していくつか縁談をもってきてくれた。兄二人は疾とうに結婚して子供もいる。そのうち、親父もお袋も死んでしまうと、野中の縁談などを気にかけてくれるものもない。

偏食のおかげで野中は若い時から痩せている。それで顔にはシワができ、実際以上に老けてみえ、いよいよ若い女の子は寄りつかなくなった。

（まだ独身やて。ヒエツ）

などといわれる。会社にもう一人、これは親が金持なので道楽がこうじて、四十二でまだ独身の男がいるが、これは金持の雰囲気きふきのせい、若々しく見えるようである。その男の独身はみとめられているが、野中の独身は、

（変人やからや）

と思われている。

野中はただ、現代の若い女のエゴむきだし、あるいは露骨な結婚願望がイヤなのであ

る。そこが変人のゆえんかもしれないが、自分ではことさらに理不尽な高望みをしたつもりはないのに、またたく間に三十代も過ぎてしまった。

そのころにトモエに会ったのである。トモエは同い年だといっていた。何となく一緒にになり、仲よくやって来て、

「結婚しよか」

という話が出、

「いまさら、式なんて、エエやないの」

とトモエがいうので、

「そやな、籍だけ入れといたらエエやろ」

と野中はいった。

「籍なんて」

とトモエはいった。

「要らんやん」

「入れんでもエエ、いうのんか」

「そ。いつでも解消できるし」

「それは、あかん」

野中は決然たる声になる。

「そういう、ええかげんな、じゃらじゃらしたことはいかん」

「だって今まででも、何となく暮らしてきたんやもの、それでお互いに楽しかったんやから、これでええのやない？」

「いや、いかん」

偏食家の野中は、信念に於^{おい}ても偏向気味である。豆腐がなくては夜も日も明けぬごとく、いったん思いこんだことは変えない。はじめは「何となく」ではじまったが、「チャンとする」となると、入籍して恰好^{かつこう}をつけようと思う。結婚届を出したいと思う。

「区役所へ行ってチャンとしたい」

「……………」

「会社にもいうとく。ぼくところは兄貴らに電話しといたらええねンけど、あんたどこ、身内に挨拶にいかんでもええのか。一緒にいって親類の顔つなぎせなあかんやろ」

「ええねん、両親ももう死んでるし、ごちゃごちゃいう身内はいてへんのやけど……………」
トモエはどこか煮えきらない。

「まあ、そんなこと、どうでもええのと、ちがいますか、そない、せいてすることでもないし」

世の中変ったな、と野中は思った。昔は女が入籍を迫り、「チャンとしてほしい」とせがんだものののに、今は男のほうが「チャンとしたい」と訴え、女が「そんなことどうでもええ」というのだ。「チャンとしたい」という話は、前々から野中が持ち出していたが、トモエがそのたびに話題を転じたり、うわのそらで返事して、はぐらかしたりしている。

そのときも話をまぎらせたふうだったので、野中は形をあらためて、「いつまでも、こんなんしとったらあかん、結婚届出せるようにしときや。ぼく、本籍は南区やよってな、手続きしといてや」

と釘^{くぎ}をさした。トモエは野中と一緒に暮らすようになってから、野中の希望で勤めをやめている。昼間は時間があるはずだから、トモエに托したのである。

トモエはさからう口調ではないが、

「けどねえ、もしかして、アンタが途中でいやになって別れたい、思うたとき、アタシがイヤや、いうたらどないすんのん？ すったもんだするよかき、はじめから、ゴチャゴチャせなんだらええやないの。たかが紙きれ一枚や。氣イにすること、あらへん。内縁なら離婚のさわぎもないし、アタシとアンタ、こないして仲ようしてる、それでええのん、ちゃう。ハンコや書類なんか、どっちゃでもエエ、思うわ」

と放胆なことをいった。

野中はトモエの、そういう野放図なところも、実は好きだ。

トモエとはミナミのスナックで知りあったのである。玉屋町の路地の奥の、小さいスナックで、カウンターに七、八人も入ると満員になる。野中は、店を間違って入ったのであるが、一ぱいだけ飲もうと、薄いウィスキーの水割りを注文した。ごたごたした汚い店であるが、かなり婆さんのママが一人いるだけ、客は女一人であつた。常連なのか、婆さんと心安く口を利いている。婆さんのママは、体がえらいのでこの仕事もやめたい、といつていた。

「トモエさん、あんたここ、続けへんか」

「アタシ？」

トモエは目をみはつていた。みはつても小さい目なのであるが、形はよくて、パッチリしている。白い大福餅だいふくもちに、黒い碁石をはめこんだようである。目鼻がぱらぱらと離れてくつついているが、見苦しくもない。

「アタシはあかんわ。第一ねえ、自分で飲んでしもて、一人で酔うてるにきまつてるわ。それにマイク握ったら離せへんし、お客さんに歌わせへんから、あかんわ」

「そうかもしれへんなあ」